

私の研究テーマの一つに、胎児期や乳幼児期の環境が子どもの発達にどのように影響するかというものがあります。というのも、環境省が進める「子どもの健康と環境に関する全国調査（通称エコチル調査）」に関わることになったからです。エコチル調査は、日本の十五の地域において十万人の妊婦さんにご協力いただいて、妊娠中から十三歳になるまでの環境と子どもの健康状態を調べ、どのような環境が子どもの健康に影響しているのか、を調べる調査です。実は、この調査地域に宮城と福島も入っていました。その中で、今回の東日本大震災が起きたのです。

一緒に研究を進めてきた先生方も、スタッフも被災されました。そしておそらく、この調査の参加者も被災されていると思います。この場をお借りして、心よりお見舞い申し上げたいと思います。一日も早い復興を祈るのみです。また、原発事故もあり、福島の妊婦さんや小さいお子様がいらっしゃるご家庭の方々のご心配はいかばかりかと拝察いたします。

胎児期・乳幼児期の環境と発達

藤原武男

胎児期に困難な環境にいと、大人になってから成人病を発症しやすい、という有名な学説があります。つまり、胎児期に飢餓状態にあると、胎児は産まれた後も食事を得ることができないと予測し、栄養をため込む遺伝子が発現するようにプログラムされます。そして産まれた後、栄養が豊富にあると、糖尿病等になりやすくなる、というものです。しかし、産まれた後の生活習慣次第では予防できると考えられています。一方、胎児期、乳幼児期に困難な状況にあると、ストレスに強くなる、ということが鳥の研究ですが示されています。この震災の中で生まれた子どもたちが、どうかストレスに強い子どもへと育ってほしいと願います。否むしろ、エコチル調査で、妊娠期に困難な状況にあった場合に、どのような要因があればストレスに強い子どもが育つのか、明らかにできればと思います。そうした研究が、被災された方の希望の灯となれば幸いです。

（ふじわら たけお／東洋哲学研究所委嘱研究員）